

Title	『ナロオド』の思想
Sub Title	The thought of "Narod"
Author	中村, 勝範(Nakamura, Katsunori) 内川, 正夫(Uchikawa, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1980
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.53, No.4 (1980. 4) ,p.1- 23
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19800415-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ナロオド』の思想

中 村 勝 範
内 川 正 夫

一 問 題 の 所 在

大正十年七月に、新人会は機関誌『ナロオド』を刊行した。⁽¹⁾ 新人会は大正八年三月に機関誌『デモクラシイ』を創刊し、それが順次『先駆』、『同胞』、『ナロオド』と改題されてきた。本稿は『ナロオド』をとりあげ、その思想を考察する。

『ナロオド』創刊時は経済不況の時代であつた。労働運動は長期化かつ深刻化し、さらにサンヂカリズムの影響により暴力的直接行動に訴える争議が増加した。他方、言論界ではロシア革命の原理を解明するために、『ナロオド』は『同胞』の後継誌とする経済学説、社会理想論が熱心に研究されていた。このような時代的背景のもとに、『ナロオド』は『同胞』の後継誌として創刊された。『同胞』が、来月から面目を一新させ新企画で出発する、と予告したのは大正十年四月に発行された第七号においてであつた。しかし、この企画は延期となり、次号は『同胞』の第八号として発行され、六月休刊の後、七月に至り『ナロオド』は創刊された。『同胞』の予告には『ナロオド』という名称の予告発表はない。『同胞』から『ナロオド』

への改題理由は必ずしも明らかでないといわれる。⁽²⁾ しかしながら、理由の一つを『同胞』の発禁にもとめる立場がある。⁽³⁾ 『同胞』は労働者階級に読者をもとめていたが、警察にとつては学生知識人よりも労働者階級をより危険視していた。従つて、労働者階級対象の『同胞』が三号も続けて発禁になつたことで、体質改善をせまられたというのである。その結果、機関誌名が『ナロオド』になつたというわけである。さらに、新人会が機関誌名を変更し、知識人向けにという初期の方針もどつた裏には、ほとんど効果のない地方会員制への失望があつたにちがいない、⁽⁴⁾ という指摘もある。また、『ナロオド』は「創刊の辞」⁽⁵⁾と創刊号の巻頭論文で「ヴ・ナロオド」運動の意義と限界を明示した。新人会はこの運動は宗教的ではあつても政治的ではなかつたとする。他愛的な精神を持ち、人民の中へゆくことは意義あることではあつても、それによりただちに新しい社会の建設が可能になると考えたことは楽観的すぎる、と新人会は限界を明らかにした。新人会は「ヴ・ナロオド」運動は失敗であつたとしながらも、「我等に懐しくも響く一つは『人民の中へ』の運動である」と断言している。新人会は、ロシアの青年が人民の中にゆき、ともに生活し、ともに苦しみ、ともに喜んだことを、巻頭論文で評価した。新人会は、この運動の実際面での効果には限界があるとしたが、精神は崇高であるとした。新人会はこの運動の、精神を学ぼうとした。従つて、それが『同胞』から『ナロオド』への改題理由である、⁽⁷⁾ともいわれる。

機関誌名にあらわれた『ナロオド』は以上のごとくロシアのナロオドニキの運動に由来した名称であつた。ナロオドニキの運動は「ヴ・ナロオド」を目標に学生が農民階級の中へとびこみ急進的革命思想を宣伝する活動であつた。その際、ロシア青年の中核思想はロシア独自の農民共同体制度に地盤をおき、そこからただちに社会主義社会への転換が可能であるとするものであつた。ロシアの革命運動はナロオドニキによつて推進されたが、農民の革命への無理解と苛酷な弾圧を原因としてやがて衰退する。新人会もナロオドニキの衰退を運動の失敗と評したが、思想は正しいとの立場をとつた。一方においてこのような立場を持しながらも『ナロオド』の論稿ではナロオドニキよりもボルシェヴィズムに関係するものが多い。⁽⁸⁾ボル

シエヴィズムはレーニンが構築した思想である。レーニンは一八九四年に『人民の友とは何か?』を書き、反ナロオドニキの立場をとつた。ボルシエヴィズムはロシアの伝統的社會の破壊の上に成立する思想であり、伝統的社會の生存を認めるナロオドニキとは対立する思想であつた。新人会はこの対立する思想を同時に受容した。新人会にとつてこの兩者はともにかれの理想に反しないものであるとされた。このようにナロオドニキとボルシエヴィズムの兩者に同時に接近しながらも、『ナロオド』はボルシエヴィズムの研究を大量に掲げた。それは当時の思想界においてボルシエヴィズムの研究が盛んであつたことにもよる。新人会はボルシエヴィズムを研究し、ボルシエヴィズムにより建設された労働ロシアを極めて理想的な社會であるにとらえた。『ナロオド』には、ボルシエヴィズム以外にも数多くの思想が受容されたが、圧倒的にボルシエヴィズムが優位であつた。時代的趨勢が原因であることはたやすいが、趨勢であるということをもつて、新人会が自分達の理想に反する思想を受容したとは思われない。新人会にとつてボルシエヴィズムは、それに傾斜するに値する思想である、と判断された。つまり、新人会はボルシエヴィズムを自分達の理想と合致するものととらえた。そうであるとするれば、新人会の理想とボルシエヴィズムには新人会員の思考の中において結合点があるはずである。自分達の理想と結合点を有するからこそ、新人会はボルシエヴィズムに傾斜したのであろう。従つて、我々は、本稿において、『ナロオド』の思想にあらわれた新人会の理想とはいかなるものであり、さらに、それがいかなる点でボルシエヴィズムと結合し得たのかについて順次考察していくものである。

(1) 『ナロオド』は菊倍版十六頁、定価十銭であつた。編集発行人は六号までが、千葉雄次郎、七号は来間恭、八、九号は黒田寿男であり、発行所は七号までが駒込上富士前町五、八号は東京市外下落合三六三遠藤方、九号は牛込区富久町一一三友岡方となつてゐる。なお、六号は来間恭の「敵か味方か」が理由で発売禁止処分を受けた。

(2) 法政大学大原社會問題研究所編『新人会機關誌』へ法政大学出版局 一九六九年三月に附されている増島宏「解題」五八九頁。

(3) H・スミス『新人会の研究』(松尾尊允・森史子訳) 東京大学出版会 一九七八年十二月 二六五頁。

(4) 右同 七十五頁。

- (5) 創刊の辞「未来は民衆の手に」(『ナロオド』第一号 大正十年七月 一頁)。
 (6) 小岩井浄「人民の中へ」(『ナロオド』第一号 二―三頁)。
 (7) 佐々木敏二「『新人会』(前期)の活動と思想」(同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究 一三号 一九六八年三月 一九二頁)。
 (8) 第一号では、細迫兼光「ロシアに於ける知識階級の現状」、千葉雄次郎「クレムリンの婦人登、和田元「海外時潮」の中で「過激派と資本主義」、第二号では、千葉雄次郎「労働露国に於ける青年運動」、第三号では、千葉雄次郎「饑餓の露西亞」、中川実二「種のデモクラシイ」、和田元「PとKとの話」、長田三郎「農業税の意義(レニオン)」、第四号では、中川実「過激派の苦境」と其対策、波多野鼎「露西亞労働運動史考(一)」、第五号では、波多野鼎「露西亞労働運動史考(二)」、後藤信夫「露西亞の飢饉」、第七号では、丘本三郎「独裁制を通じて民主主義に(クララ・ソエトキン)」、第八号では、黒田寿男「十月革命後のロシア労働組合」、第九号では、松川亮「労働ロシアの新経済政策について」、ゴルドシュミット「莫斯科紀行」(千葉雄次郎抄訳)、黒田寿男「十月革命後のロシア労働組合(一)」。
 (9) 新人会におけるボルシェヴィズム研究が盛んになったことについてはつぎのような指摘もある。すなわち、『ナロオド』はロシア共産主義に関する記事や論文が圧倒的に多く、(中略)、ソビエトの例をとくに取上げ、それに焦点をしばつたのは『ナロオド』だけである。これは当時ボルシェヴィキ政権の成立とその初期を論ずる英文新著の流入によるところが大きい(前掲『新人会の研究』六十九頁)ということである。

二 ボルシェヴィズムの抬頭

『ナロオド』も、『デモクラシイ』、『先駆』、『同胞』と同様に反資本主義の姿勢をとつた。『ナロオド』は、第一次世界大戦後の戦後恐慌を踏まえて、資本主義こそ恐慌を発生させ、労働者の生活を窮状に陥れる元凶であるとした。⁽¹⁾つまり、資本主義体制のもとでの支配者である資本家は、自からの無能力が原因で恐慌を発生させながら、労働者に犠牲を齎寄せさせる、労働者は、賃金カット、減首という齎寄せを受けざるを得ない、と『ナロオド』は指摘したのである。⁽²⁾『ナロオド』は資本主義の思想のうち私有財産制度に対して批判的態度をとつた。人間の周囲にある物は一つ残らず万人の労働の結果であるか、もしくは人類に平等に与えられた自然である、というのが新人会の財産に対する価値観であつた。従つて、新人会の価値観とまさに対立する私有財産制度を容認する資本主義は、新人会にとり必然的に攻撃の対象となつた。また、『ナロオド』は、資本主義社会にあつては、雇傭者と被雇傭者の人的友愛関係は消失し、個人的打算で人々は競争することになり、

資本家と労働者の敵対関係は高まり、労働者の地位は不安定なものになり、家庭は解体すると指摘した。⁽³⁾ 資本主義社会は物質的には絢爛たるものになったが、道徳的には沈滞したものになり、一見目覚しく見える成果も、人類連帯、社会奉仕の破壊の上に打立てられた、⁽⁴⁾ という指摘が見られた。

この人類連帯、社会奉仕の破壊をもたらす資本主義を打破するために、『ナロオド』も前三誌同様数多くの思想を受け容れた。しかし、『ナロオド』誌上でもつとも好意的な評価を受けたのは、ボルシェヴィズムの思想であつた。もちろん、ボルシェヴィズムが無競争的に受容されていたわけではない。たとえば、ボルシェヴィズムと並んでサンヂカリズムも『ナロオド』には受容された。サンヂカリズムはこの時期の無産運動における思想潮流の一つであつた。特に『ナロオド』の初期のものではこの思想の影響が大であり、労働争議における総同盟罷業の経過が報告され、議会政治が否認され、労働組合の他の組織に対する優越性が説かれるなどサンヂカリズム特有の主張が掲げられた。⁽⁵⁾ 『ナロオド』によれば、労働者の力は選挙権にあるのではなく、労働者の生産能力にあるとされ、その威力を示す最後の手段は生産を停止することだとされた。さらに、労働者はすべての経済問題を議会政治の力によつてではなく、労働組合の力で解決すべきである、投票によりすべての経済問題が解決すると考えることは現代のもつとも不可思議な思想である、とされた。新人会は、サンヂカリズムについて、これは人民の人格的未成熟により生じた資本主義を打破するための思想である、とした。すなわち、労働組合をつくり、労働者の生活を豊かにし、余裕を与え、次第に教育程度を高め、人民の人格を向上させ、そのことをもつて資本主義を打倒し理想社会を樹立するための思想である、⁽⁶⁾ とらえた。

『ナロオド』はやがてサンヂカリズムよりもボルシェヴィズムへの傾斜度を高めていく。労働者階級を解放するための手段として、サンヂカリストは総同盟罷業をあげる。このサンヂカリストの主張に対し、実際のところ総同盟罷業は効果をあげていかなかった。現実を直視すれば、フランスではC・G・T (Confédération Générale du Travail) が改良主義とな

り戦闘性を失なつていたし、アメリカの I・W・W (Industrial Workers of the World) もそれほど目立つた活動をしておらず、総同盟罷業の実効性には疑問がもたれるようになっていた。サンデカリズムは現実を無視している、と『ナロオド』は主張する。⁽⁷⁾ サンデカリストが微温的な組合を出でて戦闘的な組合を組織せよと主張しても、現実は一掴みほどの組合員しかいない組合をつくり得るのみであつた。サンデカリストの主張はまさに空中樓閣的な希望的観測である、とも『ナロオド』は指摘した。⁽⁸⁾ これに比べ、ボルシェヴィズムに対する評価は極めて肯定的であつた。労働組合の現状を見ると、現段階では官僚的な指導者に操られて、期待し得るような戦闘力を持つていないとはいへ、幾百万の組合員は遠からず革命のために立ち上がるのである、サンデカリストはこの現実を等閑視してはならず「組合を出でよ」というが、そうではなくて、ボルシェヴィズムが提唱するように一層ねばり強く労働組合の内部に食い込むことが必要である、と『ナロオド』は結論づけた。つまり、理想社会建設のためにサンデカリズムよりもボルシェヴィズムの方に実効性があると判断した。従つて、反資本主義という共通面をもちながらも、サンデカリズムは新人会から現実無視の思想である、とされたのである。

アナーキズムはサンデカリズムに影響を与えた思想であるが、このアナーキズムについて『ナロオド』は現実無視であり、統治原理としての適格性を欠くものであると断定した。アナーキズムは無産運動の本流ではない、とする『ナロオド』は、アナーキズムは本質的に啓蒙の思想であり直接的手段というよりも自己の未来社会観の覚醒を目的とするものだ、とした。⁽⁹⁾ 事実、新人会も相互扶助社会建設の理念をクロボトキンなどのアナーキストから学んでいた。⁽¹⁰⁾ しかし、マルクスやレーニンがアナーキストと決別したことは、新人会のアナーキズム観を変貌させる。レーニンは、社会主義を実現するために、科学の上に基礎を置いた資本主義的技術、系統だつた国家組織が不可欠の条件であり、それにより民衆を生産及分配の一定標準に厳格に服従させることが必要である、と主張していた。さらに、レーニンは、自分達マルクス派のものは常にこのことを主張してきたのに、アナーキストはこれがわからない、とも述べた。⁽¹¹⁾ 『ナロオド』がレーニンのこの主張を紹介し

たことは、新人会が理想社会を建設するためには、アナキストがというような権力支配からの解放のみでは不充分で、国家による支配とそれへの服従が必要である、と認めたことを意味する。

新人会がアナキズムとサンヂカリズムを排撃し、ボルシェヴィズムに傾斜したことについては背景がある。つまり、新人会のボルシェヴィズム傾斜は、大正十年夏ごろより労働運動内において再燃した総連合運動と無関係ではなかつた。総連合運動の過程で展開されたアナ・ボル論争が新人会にも影響を与え、その縮図が『ナロオド』にもあらわれたということである。アナ・ボル論争の中で、新人会はアナ・ボル両者に理想社会建設の理念を見出した。理念の問題を離れて日本改革の方法となると、新人会はボルシェヴィズムを採用した。

資本主義を打破し、理想社会を建設しようという理念は、なにもアナキズム、サンヂカリズム、ボルシェヴィズムのみの専有物ではない。従つて、新人会はその他の思想にも接近した。たとえば『ナロオド』の中にも、ギルドソーシアリズム、フェビアン主義など多様な思想が少数勢力ではあれ根をおろすことができた。このことは、『ナロオド』においても、前三誌同様に、新人会が多様な思想を受容していたことを示す⁽¹²⁾。また、『ナロオド』自からも思想の自由を宣言した⁽¹³⁾。『ナロオド』に見られる思想で、アナキズム、サンヂカリズム、ボルシェヴィズム以外のものをあげれば、イギリス流の社会主義が代表的である。この思想に関する論稿は、個人主義に立脚した人格向上の思想をもつて、資本主義を打破し、さらに理想社会を建設することを、主張していた⁽¹⁴⁾。このような主張が一部に見られても、『ナロオド』の多様な思想の中で多数派となつたのは、個人主義ではなく、むしろ全体主義的なボルシェヴィズムであつた。多元的な思想潮流の中で、新人会員の多くはボルシェヴィズムに傾斜していつたが、それは「時の勢い」を反映していた。マルキシズムやソ連版マルキシズムであるボルシェヴィズムに対しては批判的見解もあつた。しかし当時の日本ではマルキシズムやボルシェヴィズムの研究熱が高⁽¹⁵⁾く、論調はボルシェヴィズムに好意的なものが多かつた⁽¹⁶⁾。『ナロオド』も大量の労働ロシア関係の論稿を掲げたが、論調は

時代の趨勢を反映して好意的なものばかりであつた。新人会は労働ロシアに対して共感を覚え、革命過程に生じた困苦に同情を示した。新人会がこのような姿勢を示したことについては、時代の趨勢であると共に、新人会のボルシェヴィズムへの期待感がより強い原因となつた。従つて、次節においては、新人会がボルシェヴィズムの如何なる点に共感を覚え、また期待したかを考察する。

- (1) 大正九年三月以降、戦後恐慌が発生し、労働者に対する賃金カット、誠首がおこなわれ、労働争議も長期化、深刻化する傾向が見られた。
- (2) 長田三郎「資本主義下の専制と混乱状態」(『ナロオド』第一号 大正十年七月 六頁)。
- (3) 平直蔵「産業革命に就て」(『ナロオド』第四号 大正十年十月 十一頁)。
- (4) 佐々弘雄「英国労働党の組織改造」(『ナロオド』第六号 大正十年十二月 八頁)。
- (5) 早坂訳「労働と政治」(『ナロオド』第二号 大正十年八月 十五頁)。
- (6) 早坂二郎「最低賃銀の話」(『ナロオド』第一号 七頁)。
- (7) 小岩井浄「総同盟罷業に就て」(『ナロオド』第五号 大正十年十一月 三頁)。
- (8) 千葉雄次郎「共産主義と労働組合」(『ナロオド』第五号 五頁)。
- (9) 笹川暢「行為の宣伝」(『ナロオド』第四号 十五頁)。
- (10) 中村勝範・酒井正文「『同僚』の思想」(『法学研究』第五十二卷第十一号 昭和五十四年十一月) 参照。
- (11) 長田三郎「農業税の意義(レーニン)」(『ナロオド』第三号 大正十年九月 十一頁)。
- (12) 「デモクラシー」から、「先駆」「同僚」「ナロウド」と改題を重ねた新人会の機関誌をふりかえつてみても、ルソーの『民約論』も、ヘルツェン、バクーニン、トロポトキンなどナロードニキの系譜も、サン・シモン、フーリエなど空想派社会主義も、ブルードンも、マルクス、エンゲルスもラッサールも、すべては『大正デモクラシー思想』に包摂されて、いうなれば「仲よく同時開花」しているのを見出すでしょう。(『風早八十二』治安維持法五十年) 合同出版 一九七六年十一月 四十八頁)。
- (13) 「各人の自由に従い、各自の正当と信する処に向つて行動する事は、よりよき方策である」(新人会三周年記念の巻頭言(『ナロオド』第六号 一頁))。
- (14) 佐々弘雄「英国労働党の組織改造」(『ナロオド』第六号 六一―八頁)。
- (15) 杉森孝次郎は「現代日本の思想界」は迷信と軽信の二極にわかれ、その中間に常識的妥協があるとした。つまり、思想を受容するにあたり、迷信、軽信、常識的妥協の三種の姿勢があつたという。たとえば、デモクラシー、社会主義、労働運動、国際主義、普通選挙、婦人解放、文化主義などの思想を頭から新しいもの、外来のものとして排斥するような態度が迷信であつた。逆にロシア革命以後、急に共産主義の信者となるような態度が軽信で、その信するところはすべて西洋に源を発しているようなものであつた。杉森は、さらに、軽信の中でも、とくにマルキシズムに対する研究熱の過熱化ぶり

をつぎのように評した。すなわち、「マルクスといへば、世界でいま時になつてあれほどの研究騒ぎをしたのは、日本一国だろう。露西亞は別としてだ。この事は、しかしながら、他国が済ました程度の研究をも、日本は最近まで企てなかつたという意味をも持つ」というものであつた。(現代日本の思想界) 八『解放』第三巻第六号 大正十年六月 三十三—三十九頁)。

(16) 山川均は「ソウイェットの研究」を、『改造』(第三巻第五号 大正十年五月 二十二—四十九頁)に掲げるなど、この当時、精力的に労働ロシアの研究に従事していた。「ソウイェットの研究」は、(一)労働露国の政治組織、(二)ソウイェット思想の起源、(三)ソウイェットの發達、(四)ソウイェットの組織、(五)莫斯科ソウイェットの選挙方法、(六)ソウイェット大会の組織、(七)中央権力の組織、(八)中央執行委員会と人民委員、(九)ソウイェット制度の特質、(十)ソウイェット制度の実際、(十一)ソウイェット制度の将来、を内容としていた。但し、本文中では(四)以下が一つずつズレている。当時あつて、これほど総合的に労働ロシアの研究を進めたものは少なかつた。山川はこの論稿中において労働ロシアに対して好意的な評価を下している。たとへば、山川は、ソ連の選挙が共産党に偏していると指摘した。バートランド・ラッセルの見解をしりぞけ、正しい選挙が実施されたとしたジョージ・ランズベリの好意的見解を採用した。このような山川のボルシェヴィキ傾斜は、宮崎龍介が『解放』(第三巻第五号 大正十年五月 一二—二六頁)に山川を疑問視する「社会主義市場と山川均氏」を発表するほど、強かつた。宮崎は、山川商店の品物が珍品ぞろい、新鮮であるといいつつも、その品物がモスクワ直輸入品らしく、折角の山川商店があまりにロシアの支店めいて、お店の信用、否その製造能力のほどを疑わしめる恐れなしとせず、と論じた。吉野作造も、ボルシェヴィズムに対して好意的であつた。たとへば、吉野は、『中央公論』(第三十六年第二号 大正十年二月 八十三—八十五頁)の「時論」において、「過激派の世界的宣伝の説」を掲げ、その論稿中でボルシェヴィズムに対する好意的見解を述べている。すなわち、官僚たちはロシアが自分達の主義を全世界に宣伝し、万国をその支配下におこうとしているというが、ボルシェヴィキの主張する社会改造は決してソウイェット一国のみのためになされるものではないと弁護したのである。永井柳太郎は「西にレーニン東に原」と社会変革をめざす時の人として、レーニンを評した。永井の評にもあるように、時の人であつたレーニンの「戦争より平和へ」が『解放』(第四巻第一号 大正十一年一月 一〇—五頁)には翻訳掲載された。この翻訳に際しても訳者は労働ロシア擁護の姿勢を示した。すなわち、訳者は、労働ロシアが食糧危機から資本主義化したというが、レーニンは絶対に資本主義の復活などはないといつていたのでその主張を聞こうではないか、とよびかけたのである。以上、例示したように、思想界においては、労働ロシアに対する好意的見解が数多くあつた。

三、労働ロシア

新人会は、労働ロシアでは資本主義下で犠牲となつてきたものがすべて解放された、ととらえた。「ナロオド」は、資本主義下で犠牲となつているものはプロレタリアート、労働組合、婦人、青少年であつたが、労働ロシアでは、知識階級が破産し、プロレタリアートが主人公となり労働組合は国家機関の一部として活動するようになった、婦人も生々とした活動

をはじめ⁽³⁾た、青少年もはつらつとした運動をはじめ⁽⁴⁾た、と讚美した。新人会は労農ロシアに全面的に好意的であつたがために、革命後のロシアに飢餓や動乱が発生しても、それらの災厄に堪え忍んでいることが立派である、という評価をした。

労農ロシアが従来⁽⁵⁾の失敗を克服するために、共産主義を棄て資本主義を採ることになつたのではないか、と報道された際にも、新人会の見方は違つていた。新人会は、労農ロシアにおいて資本主義の復活などにはあり得ない、と論評した。現実にも、新人会にとり打倒すべきは、人類連帯、社会奉仕を破壊した資本主義であつた。労農ロシアはこの資本主義を打破し、人類

連帯、社会奉仕を復活させ、理想社会を築きあげたのである。従つて、労農ロシアが理想社会を捨てかつての悲惨な資本主義社会にもどるはずがない、というのが新人会の考えであつた。『ナロオド』は、このように、労農ロシアでは資本主義は復活せず、と断定した。さらに、労農ロシアの選挙についても言及し、選ばれた代議士のほとんどが共産黨員か共産党支持者である点をとらえ、この調子であれば十分にレーニンが死んでも依然として労農ロシアの天下は共産黨員のものであり、ボルシェヴィズムは亡びないし、ロシアが共産党のロシアである限り、そこに資本主義が復活しようなどということはありません、としたのである。労農ロシアが飢餓状態を克服するために、資本主義を採用したという見方についても、『ナロオド』は否定的であつた。⁽⁷⁾『ナロオド』は、労農ロシアの飢餓は今にはじまつたことではない、という。つまり、ロマノフ王朝の時代から、ロシアでは慢性的に飢餓はあつたというのである。従つて、新人会は、飢餓の原因が労農ロシアにある、とはとらえない。さらに、ロシア革命では生産手段は公有化され、ブルジョアの不労所得を没収したのに、プロレタリアートが飢餓状態に陥るということは理論的におかしいのではないか、という疑問に対しても、『ナロオド』は矛盾ではないという。つまり、ブルジョアが莫大な費用を投じた宏壮な邸宅などは贅沢物であつて、それを没収したからといつて、プロレタリアート一般の消費には役立たないのであるから、絶対に矛盾ではない、という。また、プロレタリアートの生活に役立つ

ものを生産するにはまた長時間がかかるので、物資の不足は続いてもいた仕方ない、現段階における労農ロシアの状態は理想社会実現の過程では避けることが出来ない、と新人会は飢餓状態をとらえた。この飢餓状態を克服するためにはいえ、本来打破すべきはずの資本主義に戻るなどとは絶対にあり得ない、と新人会は判断した。

新人会は労農ロシアにおける「独裁」についても極めて好意的評価を与えた。『ナロオド』は、民衆の思考の中にブルジョアの思考の残滓がある限り、「独裁」は必要であるといい、民衆の人格的成長が完成するまで「独裁」があつてもいた仕方ない、とした。つまり、民衆の人格的未成熟を補完するものとして「独裁」は把握されていた。すなわち、新人会員は、「民衆がブルジョア其俚の功利的な貪欲な人生観を抱えている以上（中略）、極度の圧制すら其為に必要なとせられなければならない。人々が斯様な利己的な、貪婪な人生観から解放されて、新しい態度に出る時まで独裁はその姿を潜める事はないであらう」と考えた。『ナロオド』はそのころのわが国における政治的課題となつていた普通選挙権の問題を関連させながら、「独裁」の妥当性を強調している。『ナロオド』によれば、普通選挙は、ブルジョア・デモクラシーの基礎をなすものであり、少数のブルジョアが「全人民の意思」といしながら行なう詐偽的行為であり、実際は民主的共和国の美名のもとになされるブルジョア・ディクテーターシップである、と糾弾されている。しかるに、このブルジョア・ディクテーターシップを排除し、対抗的にプロレタリアン・ディクテーターシップを確立したのが労農ロシアである、と新人会は把握していた。ブルジョア・ディクテーターシップは少数者による独裁であるが、プロレタリアン・ディクテーターシップは多数者による独裁であり、それ故に是認できるという立場を『ナロオド』はとつた。労農ロシアにおける独裁の妥当性に対する主張はカール・カウツキーを批判する論稿にもあらわれた。カウツキーは『プロレタリアートの独裁』を一九一八年に書き、レーニンを批判していたがカウツキーの主張に対するクララ・ツェトキンの反論が『ナロオド』に翻訳掲載された。⁽¹¹⁾ ツェトキンはプロレタリアートの独裁に反対するカウツキーを批判し、社会主義を目標としているプロレタリア革命は独裁制を外にして

は完成し得ず、就中ロシアの状態においては特にそうであり、しかもこれは一時的な現象でやがては消滅すると主張した。ツェトキンの論文が『ナロオド』に掲げられたことはここにおいても新人会が独裁を是認していたことの証明となる。

新人会は独裁が望ましいものであると考えたのではない。新人会も独裁が永続することについては否定的見解を示している。『ナロオド』ではツェトキンが主張するようにボルシェヴィズムにおける独裁が暫定的なものであることが繰返し強調された。つまり、略奪者が平定され我等と同じく労働者となつたならば、彼等に対する圧迫もやみ、無産階級の独裁政治も消滅し、階級的区別のない社会が実現する、とされたのである。さらに、独裁の終焉は時間の問題であるともされたが、独裁なき理想社会の実現についてはレーニンの発言を引用して「数十年」の時間が基準として示された。「すべての労働の習慣及び風習を改造する事は数十年を要する事業だからである」というレーニンの発言から、革命の完成には長時間を要することを新人会は理解した。叙上の理由から、革命の完成までには独裁が数十年間に及ぶことが是認できたし、数カ年にわたる規模で労働ロシアに災厄が発生し、それを克服するために独裁がなされたとしても、それは革命のプロセスにおける極めて些細なことであり、新人会がボルシェヴィズムに抱いた期待感をいささかも損傷するものではないとされた。

新人会が抱くボルシェヴィズムへの好意的評価はドイツの状況を伝える『ナロオド』の論稿においても示される。一九二一年にドイツでは二つの共産党、すなわち、合同共産党と共産労働党がそれぞれ大会を開いた。両者は第三インターナショナルに対する態度が異なつていた。合同共産党は第三インターナショナルに賛成し、共産労働党は反対していた。両共産党に生じた懸隔を『ナロオド』は報じた。両者の内、共産労働党は第四インターナショナルに賛成し、第三インターナショナルが労働ロシアに貢献する存在であるとした。この共産労働党の評を『ナロオド』は報じたのである。『ナロオド』はこの酷評は主義というよりも感情の相違であると断定し、労働ロシアが中心となつた第三インターナショナルを擁護した。同じくドイツの状況を伝えるものとしてドイツ社会民主党のゲルリッツ綱領にふれた論稿もあつた。論稿はゲルリッツ綱領がマ

ルキシズムを放棄したと伝えたが、そのことは誤認であつた。なぜならば、労農ロシア版のマルキシズムすなわちボルシェヴィズムを信奉する新人会としては、ドイツ社会民主党の主張するマルキシズムは是認できなかつた。

新人会はこのように労農ロシアに好意的であつた。それは新人会が労農ロシアにおいては理想社会が完成されつつあると考へたからであつた。新人会は、飢餓に苦しむ労農ロシアに同情を示した結果、つぎのような新聞記事には共感を示した。ベテログラードで発行された新聞に掲載されたこの記事は、ブルジョア達は飢餓について考へる時、人と人とは狼のように奪ひ合い殺し合う、と想像するかも知れないが、プロレタリアートは人と人とはお互いに兄弟のように助け合う、という内容であつた。新人会は、この記事に深く共感を覚え、現実の労農ロシアにおいては数年来の欠乏の上にさらに大危機が加えられたにもかかわらず、依然として忍耐強い民衆は、全力を尽してお互いに援助し合つていと紹介した⁽¹⁶⁾。新人会は、このお互いに援助し合えるということに驚嘆し、労農ロシアは人々がお互いに援助し合える社会である、ととらえた。また、『ナロオド』では、労農ロシアが相互扶助の社会になりつつあることが紹介されている。プロホーロフ工場におけるゴールドシュミットの体験談は、労農ロシアが新しい社会であることを伝えた⁽¹⁷⁾。同工場では、かつてはブルジョアであつた元工場所有者のプロホーロフ家の家族も労働者とともに働き、家族も新しい状態に適応していると紹介した。工場の主人役は労働者ということであるが、もとの所有者もいまは労働者になり、労働者という資格においてふたたび工場の所有者となつてゐるという。つまり、全員が働き、お互いに扶助し合う社会がプロホーロフ工場にある、と新人会は理解したのである。同工場の情景描写中には、工場の共産党の集会模様を紹介するものがあつた。すなわち共産党の集会は一言にしていへば家族的集會のようなものであるという。共産党が工場を支配しているとはいへ、それは暴力的威嚇をもつてではない。支配は目的を有する労働者の自覚によりなされてゐるのであるから、会合も自ずと家族の会合のように和氣藹々としたものになつたと新人会はとらえた。以上の描写からも、我々は新人会が抱いた労農ロシア観を知ることができる。新人会は労農ロシアでは、

資本主義が破壊した人類連帯、社会奉仕が復活していると考えた。ここに新人会が労働ロシアの思想であるボルシェヴィヰズムに好意的となつた理由がある。

- (1) 細迫兼光「ロシアに於ける知識階級の現状(モイッセーオルシン)」(『ナロオド』第一号 四頁)。
- (2) 「十月革命は曾に政権をプロレタリアートの手に移したのみに止まらず、経済的勢力をも亦労働階級の手中に移した。労働者と備主との間の従来の一切の關係は完全に崩壊した。資本主義の關係の基礎の上に立ち、かつ労働階級の戦闘機関としての役目をもつて發達してきた労働組合は、此時から其の性質を改めて、労働者国家の機関の一部となつた。」(黒田寿男「十月革命後のロシア労働組合」『ナロオド』第八号 大正十一年二月 十四頁V)。
- (3) 千葉雄次郎「クレムリンの『婦人祭』」(『ナロオド』第一号 十四—十五頁)。
- (4) 千葉雄次郎「労働露国に於ける青年運動」(『ナロオド』第二号 三頁)。
- (5) ソ連の資本主義化という情報は当時数多く報道されていた。たとえば、「たとえ戦略的であるにもせよ、労働露国の資本主義への退却は、明に今日の世界の経済關係を以てしては、或一國だけが独立して共產主義の如き特異の経済制度を施行することが不可能であることを立証するものである」(林癸未夫「国家的利己心を超越せよ」『中央公論』第三十七年第十一号 大正十一年十月号 六十六頁V) というものがその一例である。
- (6) 和田元「過激派と資本主義」(『ナロオド』第一号 十二頁) なお、和田元は嘉治隆一のペン・ネームである。
- (7) 千葉雄次郎「饑餓の露西亞」(『ナロオド』第三号 四頁) なお、千葉は「プロレタリアと文化」(『ナロオド』第七号 大正十一年一月 三頁) においても、労働ロシアの飢饉についてふれている。すなわち、「ロシア革命が文明の破壊でなくして文明の進歩である」といい、「労働露国では、ブルジョアが自分達の独占であると妄想している近代の諸施設が、何人を奴隷とする事なくして、万人の享樂の為に壮大に計画されている事である」と労働ロシアが万人の爲の社会であることを強調した後、「労働露国は今甚しい饑餓に襲われている。吾等の同胞は日々のパンをも節して、新社会建設の為に全力を尽している。同情のないブルジョアは共產主義の破綻を叫んで笑つている然し露国の今日の物質的欠亡の原因は他に存する事は明瞭である。時の経過はを示してくれるであらう。」というものであつた。
- (8) 前掲千葉「饑餓の露西亞」なお、民衆に対する不信任も「ナロオド」には登場している。すなわち、その不信任は「解放せられた人類の社会を招来する為に戦つて行こうと言うものは、常に敵を予期しなければならぬ。その敵は必ずしも当面の敵なる支配階級のみならず、味方なるべき被支配階級の中にもあることを忘れてはならない。この事を私はカール・リープクネヒトの最後から教えられる。頼りになるものは民衆ではない最後まで踏み止つて戦ふことの出来る自分一人である。(中略)石を投じたものは労働者であつた。何と言う矛盾であらう。」(河野密「カール・リープクネヒトの最後」『ナロオド』第七号 十六頁V) といふものであつた。
- (9) 新人会員がこの頃に至ると普通選挙に対して失望感を抱くようになることは「ナロオド」以外においても示されている。たとえば赤松克麿は、議会政治否認まで進行する過激な論調ではないが、今の議会は「有産階級の遊び場所であり、(中略)、普選其物が悪いのではない。普選が喰ひ物にされるから頼に触る。」(『議会と普選と労働者』『八』鉱山労働者』第三卷第三号 大正十一年三月 七頁V) と述べ、普選運動のあり方について失望感を抱いた。

また、佐野学は、議会否認にまで論を進め、「要するに私は普通選挙を以て我国将来の社会組織の進化上に於ける大なる原動力であると考へ得ないものである。」(普通選挙雑感)「解放」第四卷第三号 大正十一年三月)と主張した。さらに、「政治運動所感」(「労働」第十一卷第三号 大正十一年三月 四一五頁)では、議院制度の鍵を握るのは結局資本家階級であるから、議会の成し得ることは社会政策以上には進むまいと断じた。

(10) 中川実「二種のデモクラシー」(「ナロオド」第三号 六頁)。

(11) 丘本三郎「研究翻訳 独裁制を通じて民主主義に」(「クララ・ツェトキン」)(「ナロオド」第七号 六頁)なお、丘本三郎は河西太一郎のペン・ネームらしい。

(12) 『ナロオド』第七号 五頁。

(13) 『ナロオド』の論稿で触れられた二つの共産党のうち、合同共産党とは共産党と独立社会民主党のコミンテルン加入派との合同によつて成立したものである。合同大会(共産党第六回大会)は一九二〇年十二月四日から七日までベルリンで開催され、ドイツの共産党は、スパルタクス同盟という副名を捨ててドイツ統一共産党と名乗ることになった。論稿に示された一九二二年八月二十二日から二十五日の大会では、党名が正式にドイツ共産党(共産主義インターナショナル支部)と改められた。また、共産労働党とはドイツ共産労働党のことであり、議会不参加・反労働組合を主張することを理由として、ドイツの共産党から除名された人々が結成したものである。成立は一九二〇年四月四日の大会においてなされた。論稿に示された一九二一年の九月に、同党はコミンテルンからの指令である「ドイツ統一共産党」への合流を拒否し、第四インターナショナルの建設に努力することを宣言している(須藤博忠『ドイツ社会主義運動史』 日刊労働通信社 昭和四十三年十二月 五二七 五二九 五五〇頁。また、当時のドイツの状況については、『ドイツ革命運動史』八上杉重二郎 青木書店 一九六九年十月)にも詳細が触れられている。

(14) 田中九一「海外時事 ドイツ共産党の近況」(「ナロオド」第七号 十一頁)。

(15) 河野密「ゲルリッパ新綱領短評」(「ナロオド」第八号 大正十一年二月 十三頁)。

(16) 後藤信夫「露西亞の飢饉」(「ナロオド」第六号 三頁)なお、後藤信夫は松方三郎のペンネームである。

(17) 千葉生抄訳「莫斯科紀行」(「ナロオド」第九号 大正十一年四月 十一頁)。

四 理想社会の模索

『ナロオド』には、英国では国民の九十八%が貧窮状態にあり、百人中の唯二人のみが人間としての生活を送っている、という紹介があった。⁽¹⁾ 世界一富裕だといわれる英国ですらこのような状況であるなら、他の国々は推して知る可し、というのであった。他方、労働ロシアは飢餓と欠乏とに直面しているとはいえ、百人が百人困苦をともししているを把握した。資

本主義の国では百人中の九十八人から九十九人までが困窮生活を強いられ、唯一人か二人が、遊蕩、享樂の限りをつくしているのに対し、勞農ロシアは欠乏に苦しんでいるが、すべての者が平等である。このように指摘して『ナロオド』は、人間が幸福に生きるためにはいづれを選択すべきか、という問題提起をした。つまり、いくら貧乏でも一家挙つて粥をすすつてゐる家と、金持でありながら主人だけが贅沢をして他の家族や召使には人間以下の生活をさせて平氣でゐる家とどちらの家を選択するかという問題提起であつた。新人会は、当然のことながら、貧乏でもとにがまんする社会を選択した。また、それは苦しくとも扶助し合おうとする人類相愛思想の選択でもあつた。従つて、人類相愛の世界を理想とするならば、政策としては、一見理想に反するような戦争すらも辞さない、という立場が『ナロオド』には、あらわれた。

この人類相愛の世界を探求するにあたり、新人会は当時発達しつつあつた社会学上の概念である社会連帯に注目した。『ナロオド』も、社会連帯を研究し、人類相愛の社会を模索し、理想社会がかつて実在してゐることを紹介してゐる。新人会は、人類相愛社会の典型を同族社会にもとめた。同族社会とは人類の初歩的発達段階に登場する社会である。この社会では、親近な血族があつまつて一つの生活団体をつくり、その範囲内のもは、相互に味方と信じ、その範囲外のもは、敵と看做した。味方である同族は一致協力して外敵に当り、もし同族の内の一人在他より危害を被るような場合には、同族の全員の事件として復讐したという。このように、同族社会ではいわば一種の社会連帯関係が形成されてゐたのである。同族間の連帯観念は、対外的戦闘の際のみではなく、平和的活動すなわち経済関係や労働組織にもよく表われてゐた。同族の各員は一個人としては困難な労働、あるいは困難ではなくとも一人でやつては甚だ不利な仕事においては皆が協力してこれを実行した。新人会は、同族社会における構成員の皆が協力して事にあたる社会連帯関係に共感を覚えたのである。社会連帯関係が形成されてゐるがために、同族社会では各人は自由に隣家の食卓に着くこともできたし、また事變のために飢餓に陥るものがある場合には全員は所有するすべてを提供してお互いの間に公平に分配してゐた。狩や漁は全員の協力があつて

はじめて成功するものである。従つて、獲物は各人に平等に分配された。このような分配については未開人にあつても同様であり、オーストラリアの土人やエスキモーなどにも厳格な食物分配規定があつた。彼等にとつては「氣前」が良いということが、「勇氣」のつぎに大事な道徳であり、余剰があつてもこれを仲間⁽³⁾に分配しないことは、盗みと同様に嫌悪され、禁断された。『ナロオド』は、同族社会のこのような状況をさして、共産主義がおこなわれていた、と評した。つまり、新社会は共産主義社会を社会連帯が形成された社会とした。

新人会はレーウィス・H・モルガンの国家の進化に関する学説を研究した。『ナロオド』にも、モルガンの学説を踏まえた研究があらわれた。⁽³⁾ その研究によれば、部族国家とよばれる原始的国家では真のデモクラシーがおこなわれていた。それに対し、以後の権力的国家は領土と財産所有権を民衆から奪い、デモクラシーを破壊した、と『ナロオド』は糾弾する。さらに、『ナロオド』は、現代における権力的国家の典型を資本主義の国家にもとめ、資本主義国では、人々は搾取され疲弊させられ、もつと自然な生活に懂がれている、とした。人間は資本主義的無智、貪慾、残酷さを捨てよう、経済的羈絆、残忍性及び獸的非人道から脱出しよう、それにより、かつて部族国家で行なわれていた真のデモクラシーをとりもどそう、と新人会は『ナロオド』を通じて主張した。ここにおいても、原始の同族社会に対すると同じく、新人会は理想社会が部族社会という形でかつてこの世に現存していたことを認め、自分たちが模索する理想社会のイディアル・ティプスとした。

新人会では、日本でもかつては、社会連帯関係を基礎に持つ同族社会が築き上げられており、その社会では人々は幸福な生活が出来たとする立場があつた。⁽⁴⁾ 麻生久が、『デモクラシー』に小説「農村の生活」を掲げ、日本の風土と密着した農民の幸福感が「旧暦の破壊」により奪われてゆく様を描写したことは、その一例であつた。麻生は伝統社会の中で享受していた幸福感が日本人の生活から喪失していくのではないかとの危機感を持つていた。この危機感は一入麻生に限らず、当時の日本人の胸中に深い位置を占めていた。⁽⁵⁾ 人間の幸福感は人間をとりまく自然が育むものである。しかるに、この頃の日本に

おいては、民衆は自然の恩恵に浴せなくなつた、と『ナロオド』は指摘した。資本主義のもとでは、民衆は工場、坑山、田園での労働に縛られており、自然の恩恵など受けようにも受けられなくなつた、というのである。この指摘は『ナロオド』第五号に掲げられたが、発行の季節は秋であつた。日本人にとり秋の風物詩はお月見であり紅葉狩りであつた。『ナロオド』は、資本主義社会になつてからは、プロレタリアートはお月見や紅葉狩りが出来なくなつた、という。生活が苦しくてもお月見ができることにより、日本人は心のやすらぎをとりもどせるのに、それすらかなわない社会が、資本主義の社会だというわけである。それ故に、『ナロオド』は、全人類が打揃つて愉快に自然の恩恵に浴し得る日が来るまで努力を続けよう、とよびかけた。また、農村においては、都市ほどではないが、資本主義化が着々と進行しているという指摘もあつた。⁽⁷⁾資本主義経済組織が農村において確立されるやいなや、いままで自給自足的にのんびりと暮らしていた農民は一挙に資本主義の渦中のみこまれていつた。のんびりとした生活から一瞬の内にとげとげしい生活に農民はおちこんでいくのである。自作農であつたものも土地を失なうことにより小作農になり、地主と小作人との間にはもはや資本家と労働者との関係しかなくなつた。地主と小作人の間に発生する小作争議も、直接原因は稲の開花時から結実期にかけての降雨などではあれ、農業の資本主義化が進行してきた以上、当然起る可くして起つたものであるとされている。このような農業の資本主義化は、山間僻地の村落をも襲い、日本中の農村が資本主義のもたらす弊害に呻吟しているという。すなわち、資本主義により農村の人類連帯、社会奉仕は破壊された、と新人会は考えた。新人会の意識の中では、かつての日本には資本主義が破壊した人類連帯、社会奉仕が存在した。そして人間は幸福であつた。従つて、資本主義が打倒された後に建設されるべき社会の実像が求められるとすれば、青写真は資本主義導入以前の日本の社会であつた。その意味からすれば、新人会が抱いた理想社会の青写真はそれ自体決して最新のものではなかつた。しかし、資本主義打倒のために受容した思想は、青写真に比べればまさに最新の思想であつた。

新人会は理想の社会を建設するために有効であると判断すれば、いかなる思想をも受容していつた。しかも、受容された思想の大半は西洋からの輸入品であつた。⁽⁸⁾デモクラシーをはじめとして、それらの思想には西洋社会思想の根幹ともいふべき個人尊重の思想があつた。しかし、個人尊重の思想を受容しながらも、『ナロオド』は個人が社会進化の過程で果す役割には自ずと限界があるとした。⁽⁹⁾つまり、社会を組成するものは個人であり、社会の事象もことごとく個人の身心を通じて表現されるものである、としながらも、個人はどんなに優れたものも平凡なものも、畢竟、社会組織の舞台に登場する「舞踊子」に過ぎない、と考へた。個人の力を認めながらも、社会の進化を果すためには個人の集合である集団の力が必要である、と新人会は主張した、この思考は個人主義的というよりも全体主義的な色彩が濃い。ボルシェヴィズムという全体主義に新人会が傾斜したこと、この発想は無関係ではあるまい。個人に対して全体が優越することは、『ナロオド』の論稿にも明確に示された。⁽¹⁰⁾論稿は「個我」と「集団意識」の対比を試みて、「個我」よりも「集団意識」の優越性を強調した。論稿によれば、労働者が資本家に反抗するときには、「虐げられているのだ」という相互の同情と「反抗しなければならぬ」という共通の意識を基礎に連帯することが必要であるという。個人に対して全体は優越するとはいへ、全体とよびうるものは構成員が共通の意識（共感）と同情によつて結びつけられている必要があるというわけである。『ナロオド』は「共感」と「同情」というものを個人意識が「集団意識」化したものにとらえ、社会の進化のためには「共感」と「同情」により結びつけられた全体が必要不可欠なものだとした。論稿は、「俺は生きたいんだ」という意識は常に個別的で個人生活を背景としての意識、すなわち「個我」である、という。そのような「個我」にとどまるのではなく、もう一步進んで他人をも含めた形で生存を意識し、「人間らしく生きたい」と願うことが、「集団意識」であるというのが、論稿の主張であつた。「生きたい」という意識は奴隷でも王侯でも誰もが持つている「個我」の意識である。しかし、奴隷が奴隷という自分に満足しているならば、いくら「生きたい」と願つてもそれは所詮「奴隷として生きる」にすぎない。「人間らしく生きたい」と願うの

であれば、「個我」にたよるのではなく、人間全体を考慮した「集団意識」によつて統括されることが必要である、と『ナロオド』は把握した。自分の立場のみを考えて行動するのではなく、他人の立場への「共感」と「同情」を示すことが「集団意識」の内容であつた。このような「集団意識」によつて社会が統括されるのであれば、すべての人間が「人間らしく生きる」ことができる、と新人会は結論づけた。新人会は、ボルシェヴィズムには人間に対する「共感」と「同情」があると判断したのであり、「共感」と「同情」を前提にした独裁がプロレタリアート独裁であると考へたのかも知れない。ひるがえつて、現代の社会を見て、新人会は、資本主義の国家は、この「共感」と「同情」を基礎にした集団意識を麻痺させることを企てており、「人間らしく生きたい」と考へること自体出来ない社会になつている、と断定した。

人類連帯、社会奉仕の思想に「共感」と「同情」の側面があることは事実である。さらに、「協力一致」という側面が、この思想にあることも事実である。この「協力一致」することについても『ナロオド』は言及してゐる。⁽¹¹⁾『ナロオド』は、資本主義社会ですら社会の進化のためには「協力一致」が必要であることを知つていた、と指摘している。論稿によれば、資本主義は巧妙な教育によつて民衆の「協力一致」を強いた、それにより資本主義は繁栄した。しかし、繁栄を示した資本主義も、内部には搾取者と被搾取者という階級対立があつた、やがて、民衆は有産階級のみが富裕化していく資本主義の下で働くことの無意味さを知つた、それ以後、資本主義社会には「協力一致」はなくなつた。新人会は資本主義社会において消滅した「協力一致」の復活をめざした。『ナロオド』は真の意味で「協力一致」が実現されることを「万人共存の新制度」と称した。「共感」と「同情」を与えながら、人々が「協力一致」して事にあたる社会、これこそが新人会の模索した理想の社会であつた。理想の社会において要件とされた「共感」と「同情」、さらに「協力一致」の概念を、一言にしていえば、それは相互扶助ということになる。新人会員が足尾鉾山を訪れた際も、足尾の鉾夫社会に相互扶助の精神を見出して、つぎのように感想を述べた。⁽¹²⁾確かに、鉾夫長屋はむさ苦しい。しかし、鉾夫社会には「和氣霽々たる団結」と「旺

盛な戦闘精神」があつた。新人会員は足尾行を評して、「今思い出しても愉快に堪えない」、「これほど気持ちのいい旅をしたことはない」と『ナロオド』に報告した。すなわち、物質的にはめぐまれなくても、相互扶助の精神のもとで生々と人々が生活すること、これこそが新人会にとつての理想であり、その理想を足尾鉾山で再確認したのである。新人会が理想とした相互扶助の社会は実在していた。その社会はかつては普遍的に存在していたが、資本主義によつて生存をおびやかされていた。新人会は理想社会の危機を察知し、その復権をめざした。足尾鉾山の鉾夫社会という極限された範囲に押込められた相互扶助社会を再びこの世の中心にひき出すこと、これが新人会が自からに課した任務であつた。

(1) 和田元「PとKとの話」(『ナロオド』第三号 九頁)。

(2) 川原次吉郎「同族社会時代に於ける労働状態」(『ナロオド』第三号 七―八頁)なお、川原は、同族社会について、『ナロオド』第四号にも関係論稿を掲げた。川原の指摘によれば、「同族社会時代に於ける特徴は単に性的分化以外に社会的にも階級的差等がなかつたことである。主人もなければ奴隷もない、富者も無ければ貧者もない、全ての人類は皆平等の生存権を享受し、同じレベルの上立つて夫々豊かなる自然の恩恵を均分に摂取したのであつた。又労働も協力的共同のものであつてその間に寸毫の絞取も見られなかつた。又職業的分化も未だ現生しなかつた」と家族内に於ける男女の仕事に、性的分業が支配したのみである。同族社会時代とは狩猟民時代、牧畜民時代、初期農民時代を包括する(「職業社会時代」)、『ナロオド』第四号(十二頁)ということである。さらに原始の社会組織の特徴が、石浜知行により、紹介された。すなわち、「原始の社会組織は血族団体である。同一母原の人達は同じ団体に属し共生した。男女両性はその仕事を分けて、利益も等しく分配しながら同権の下に生活した」ということである。川原も石浜も過去の社会に差別のない社会があつたと指摘しているのである。

(3) 山村喬「真の人間史」(『ナロオド』第四号 二頁)。

(4) 中村勝範・内川正夫「『デモクラシー』の思想」(『法学研究』第五十二卷第二期 昭和五十四年二月)参照。

(5) 『中央公論』(大正十年一年一回夏季特別「都市と田園」号 第三十六年第八号 九十一―九十三頁)誌上で、黎明会の同人でもあつた渡辺鉄蔵は、西洋文明の力を借りて近代化されていった都市の状況をつぎのように評した。つまり、人間は自然の祟りを受け、自然に離反したことに對して重い制裁を受けている、というわけである。渡辺がいう自然とは、春には爛漫の桜を眺めた小山、菜の花や蓮華の花が咲きみだれた野原、柳がゆれ夏の夕べ涼風を染しめ、夜露に袖を濡らして螢を追つた川辺であつた。しかし、現代の日本ではその自然が破壊され、無趣味な鉄筋コンクリート造や練瓦造の工場が一面に拡がって毒々しい煙を吐くにいたつたという。渡辺は、人間にうるおいを与える自然が日本では破壊されつつある、という危機感を表明した。

(6) 上富士前より(『ナロオド』第五号 十六頁)。

(7) 小岩井浄「農村無産階級の解放」(『ナロオド』第八号 二頁)。

- (8) 前掲中村・内川『デモクラシイ』の思想。
- (9) 「個人の力」(『ナロオド』第八号 一頁)。
- (10) 立花強助「集團意識と個我の悲哀」(『ナロオド』第九号 二頁)。
- (11) 来間恭「敵か味方か」(『ナロオド』第六号 十三頁)。
- (12) 来間生「尾尾行」(『ナロオド』第六号 十五頁)。

五 結 語

新人会は、資本主義が人類連帯、社会奉仕を破壊した、ととらえた。資本主義は、社会における人的友愛関係を破壊し、人々を個人的打算にかり立てた。資本家と労働者、地主と小作人、親と子の関係はすべて敵対関係に陥り、社会全体が解体している。新人会は資本主義の害毒をそのようにとらえた。資本主義を打破して、人類連帯、社会奉仕の社会を再構築することが、新人会の目標であつた。新人会の綱領である「人類解放」、「現代日本の合理的改造」もその意図するところは同じであつた。

資本主義を打破し、理想社会をつくり上げようとする時、新人会は数多くの思想を受容した。それらの思想はすべて反資本主義という点で共通であつた。しかるに、本稿で扱つた『ナロオド』は、『デモクラシイ』、『先駆』、『同胞』に比べて、ボルシェヴィズムの思想がより多く受容された。新人会は、ボルシェヴィズムの労農ロシアでは、人類連帯、社会奉仕の社会が復活した、ととらえた。『ナロオド』は、理念がいかに高くとも実現性の低い思想と判断すれば、これを社会改革の方法としては排除した。資本主義の打破に成功したのはボルシェヴィズムのみである、と新人会は考えた。新人会のボルシェヴィズム傾斜にはいま一つの理由がある。新人会はボルシェヴィズムの理念にも共鳴していた。新人会は、理想社会の要件を、構成員のすべてがお互いに「共感」と「同情」で結ばれており、その構成員の集合体が各員を支配し、友愛関係のもとに各

員が「協力一致」していることと考えていた。この要件はボルシェヴィズムのプロレタリアト独裁と内容的には同一のものである。このような理念面での一致があればこそ、ボルシェヴィズムへの接近がより強まった。

新人会は、ボルシェヴィズムの力を借りて、人類連帯、社会奉仕のある社会、換言すれば、相互扶助の社会をつくり上げようとした。しかし、それは厳密にいえばふたたびつくり上げることであつた。新人会は、相互扶助の社会はかつてあつたととらえ、かつてあつた相互扶助の社会の中で日本人の幸福感は育まれてきた、と考えていた。相互扶助の社会は資本主義によつて危機の状態に陥れられている、と新人会は把握し、資本主義打倒の思想としてボルシェヴィズムに期待感を持つた。『ナロオド』はボルシェヴィズムの影響を大量に受けた。最新の思想であるボルシェヴィズムに、『ナロオド』は、相互扶助社会実現の思想たる地位を授けた。新人会は思想受容の際には極めて急進的であつた。しかし、受容した思想によつて資本主義を打倒し、理想社会を築き上げる際には、同族社会にも示されたような過去の実例がひな型として求められた。その意味からすれば、理想社会の模索にあたつて新人会は極めて保守的だつたといえる。『ナロオド』は新人会の思想受容における急進性と理想社会の模索における保守性を鮮明に示したのである。

(後記) 本稿は中村、内川の共同論文であるが、一九七八年七月以降、毎月行つている「新人会研究会」の共同研究の成果でもある。研究会のメンバーは中村、内川のほか吉田博司（八戸短期大学講師）、酒井正文（中部女子短期大学講師）、宗片邦子（慶應義塾大学院生）及び大矢光雄、川島俊章（慶應義塾大学法学部政治学科昭和五十四年度卒業生）、杉本克己、玉井清（同上四年生）である。